りびんぐらいぶず　R4 (2022) 年3月第2号

# 第十七願をどうとらえるか

**◆ご讃題**

**たとひわれ仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、わが名を称せずは、正覚を取らじ。**

**(Ref『仏説無量寿経』「第十七願」註釈版聖典 p18)**

## ◆はじめに

法然聖人が第十八願を念仏往生の願と仰せになったのに対し、宗祖聖人が第十七願を大行釈の出拠とされたのはなぜか。これについて説得力ある文献があるとすれば、それは宗教哲学的に説き明かされたものに違いないと窺いおりましたところ、石田慶和先生の**『教行信証の思想』**(法蔵館刊)p141～145 に引用されていた武内義範先生の一文 (Ref**『教行信証の哲学』**p344) と石田慶和先生のご意見には、目を開かれずにおれません。

## ◆第十七願をどうとらえるか

教行信証の「行巻」には、「諸仏称名の願」が標挙されている。その内容は、阿弥陀仏のお名前が諸仏によって咨嗟されるということが願文の中心であって、文言上、諸仏主体の称名が誓われている。その一方で衆生が能行の主体となるあり方については、全く触れられていない。(中略)先生は、そこに先ず問題があると仰っている。

「行巻」の大行とは、衆生が称える南無阿弥陀佛 (能行) なのか、それとは別に、むしろ**法として存在するような、理法・ロゴスとしての名号 (所行) なのかが論じられ**、我々はただ名号の聞き手としてあるだけであって、称え手としての論理が鍛え上げられていたとは言えない。三業惑乱の決着では第十七願は、名号が所行であるような**絶対の真理、法体名号**と捉えることに落ち着かせられてしまっていたからである。

◆しかし、今静かに行巻を読むと、『大無量寿経』願文の後にすぐ「重誓偈」と「願成就の文」とが重ねて引いてあるのに気がつく。それによって宗祖が、阿弥陀仏が諸仏に讃えられたいと第十七願を起された意味をどのようにお考えであったかが明らかになる。「重誓偈」では、仏の側で諸仏咨嗟であるものが、衆生にとっては阿弥陀仏の名号が施されることであり、また「重誓偈」と「願成就文」の両文では、十方諸仏の**讃嘆**が、結局、阿弥陀仏が我々に念仏往生と不退転に住することを自然法爾に回向して下さるという功徳に帰一するとしている。(中略)それらの引文の中には、名号を衆生が称えることが、そのまま諸仏によって十方世界の中で阿弥陀仏の威神が讃えられることとして、両者を結びつけて説いていると解釈できるものが多い。

諸仏に阿弥陀仏が讃えられるということは、阿弥陀仏の名号が諸仏によって讃えられることであり、その仕方は諸仏の「稱我名」によって最も有効になされる。更に諸仏による讃嘆の中に、私が称名念仏する十方衆生の念佛も入ってくる。南無阿弥陀佛をとなふるは、仏をほめたてまつるになるとなり（Ref『尊号眞象銘文』註釈版 p655）とあるからである。私が念仏を称えることは虞れながら私が阿弥陀仏を称揚する仕方が大行として回向されたと考えられ、諸仏の阿弥陀仏咨嗟稱と異ならない。

それは『阿弥陀仏』が説かれるように、諸仏がお互いにお互いをほめ讃えるということでもある。してみれば、私が称名して名号を讃えることと、十方の諸仏が稱名することとが、**内面的に深く結びついている**というのが聖人のお考えではないかと思われる。(中略)

諸仏咨嗟稱とは、諸仏が阿弥陀仏の威神功徳をほめ讃え、阿弥陀仏の御名をお称え下さることである。その諸仏の咨嗟称名の中に諸仏の咨嗟によって催起された一切衆生の称名念仏が含まれることになる。その意味で、衆生の行たる称名念仏が第十七願の内に含まれることになるのである。

ここで、能行でもない所行でもない、能行と所行との両方の契機を一つに統一したような、能所不二を名号の本体として考える(空華派の称即名の立場)と云っても、それは**華厳哲学の適用例の一つ**であって、所行名号の趣旨を変えるものではなく聖人のお考えの第十七願、諸仏咨嗟の願の構造、名号の生きた宗教的生命というものには程遠い。

◆諸仏咨嗟の願の世界のスケールはもっと大きく深いもの、もっとダイナミックなものの切実な体験的現実であると思われる。いわば宇宙音的な念仏の世界が、現れてきているように思われる。(中略)

卑近な我々の体験に譬えると、それはコーラスのようなものだと言えよう。コーラスの喜びは一緒に同じ歌を歌う楽しさである。合唱の斉歌は御堂の中に響き渡る。響き渡る声に触発されながら私も一所懸命に唱和する。私の歌声は貧しく、調子外れであっても満堂の斉唱の中で融け合うときは、えも言われぬ荘厳な響きとなって私に迫る。衆生が聞くことと歌うことが一つになる。これは、衆生が大行を行ずる儘を聞くことに通じる。

されば、第十七願の諸仏咨嗟の願は、宇宙全体の念仏の交響楽のようなものであって、その中に私の念仏も含まれて一緒に流れていると考えることができるのではないかと云われる。(中略)諸仏咨嗟の願の言う、十方世界の諸仏が阿弥陀仏の功徳をほめ称える念仏というものは、十方世界の交響的な念仏の調和的大合唱と言ったもので、それで聖人が第十七願の意味を解釈なさるときに、先に引いたように、「**『弥陀経』の十方諸仏の証誠のやうにてきこへたり**」ということになるのである。『阿弥陀経』の説くように、東西南北上下六方段の諸仏が釈迦仏と阿弥陀仏とをお讃えになる。阿弥陀仏の功徳を釈迦仏がこよなくめでたく説き勧めることを諸仏が讃嘆することで、仏と仏との間に綿密に構造豊かに交響し合っている、そのよう

な**華厳哲学の無尽法界**の一層具体的な姿として諸仏咨嗟稱名の世界が考えられているのではないか（同 344 頁）。以上、表現を端折り改めているが、引用した武内先生の「大行」の理解は、従来の「大行論」には見られなかったもので、しかも聖人が「大行」ということでお考えだった構造をよく捉えているように思われる。

**◆第十七願上の諸問題の原点と解決の方向性**

第十七願上の諸問題の原点には**三業惑乱**がある。三業惑乱は、幕府の権力によって所行学派の論理を以て決着せしめたのであるから、決して学問的な解決ではなかった。しかし、その終結策として「諸仏如来にほめ讃えられる（所行）**法体名号**こそが正しく、称名は信心獲得前には自力に傾く虞れありとして許されなくなった。

その後空華派の善譲等による能所不二･溶融無礙の法体名号説（称名が名号に巻き上がる「称即名」）が唱えられるようになって終息したとされるが、未信の行者に称名は許されていないのだから信心獲得の道行きとして教学的に確立されたものではない。これが衆生に信前に念仏して本願招喚の勅命に目覚めしめる契機を削ぎ取り、浄土真宗で伝道教学の確立を阻害してきた教学上の悲しい現実であったと窺われる。

武内先生の見解を引用紹介された石田慶和先生のご指摘は誠に貴重なものであり、伝道教学確立上大きな可能性を提示している。合掌。

**(考察)** 宗祖が第十七願を大行釈の出拠とされているのならば、理法･ロゴス（法体名号）の所行学の根拠として終わったとするのでは足りず、能行学の根拠として捉えることが促されていると窺われる。

具体的には、第十七願を称名念仏コーラスの根拠と捉える仕方が第一点、本号では記載する誌面がなかったが聞名に到る念佛三昧の契機と捉えるのが第二点である。合掌。

(後書き)本課題への取組みは、弊誌平成三十年十二月号で取りあげた課題検討を進めたものであります。合掌。

**◆前住十七回忌＆永代経三月五日(土)十時半～**

**◆春の彼岸会　三月二十一日(月) 十四時、十九時半～**

**今月の仏壮お聴聞の会は当初六日の予定でしたが、永代経に合同し、仏婦の例会(お聴聞の会)は当初十六日の予定でしたが、春の彼岸会に合同して営ませて戴きますので、ご了解下さい。**

**お聴聞は、浄土真宗では、何はさておき継続して実施すべき大事の営みです。一方、コロナがピークアウトしつつあるとは言え、なるべく大勢での会合は控えさせて頂く為の苦肉の策であります。**

**著作編集兼発行元(本願寺派　正覚寺内)** 〒520-0501 大津市北小松四五二番地
**電話** 077-596-0166、FAX077-596-0196 住職堅田　玄宥